

文献紹介／Robert.L.Belknap/The structure of the Brothers Karamazov/Northwestern University Press Studies of The Harriman Institute、1989、(ロシア語版,Структура "Братьев Карамазовых" / Роберт Л. Бэлнеп. - Санкт-Петербург: "Академический проект", 1997. - (Современная западная русистика).)

プロフィール

ロバート・ベルナップ博士は、コロンビア大学スラブ語学文学科の教授を長年つとめ、特にドストエフスキーの専門家として世界的に高名なロシア文学者。1999年に北海道大学スラブ研究センターの外国人研究員となった奥様の Cyntia Whittaker 教授(ロシア史)に同伴して来日、北海道大学において「『罪と罰』のプロット』に関するロシア語の講義を行った。

構成

☐ Introduction

A. The Diversity of interpretations of The Brothers Karamazov

B. The divers Views on Dostoevskij's Technique

☐ The structure of Inherent Rerationships

A. Some Property of the inherent Rerationships

B. Karamazovism

C. Some Methodological Problems

D. The Devil

E. The Buffoon

F. The Nadryv

G. Divine Grace

H. The Ways in Which the inherent Rerationships shape the Reader's Experience

☐ The Plot

A. juxtapositions

B. Control of The Readers Memory

C. Use of Readers Expectations

D. Inherent Relations as Sequential Links

E. Connections in the World Shown in the Novel

F. Characters who Shape the Casual Pattern

G. Parallels between Chronological and Inherent Connections

☐ The Narrative Structure

- A. The Indistinct Narrator**
- B. His scope and Mode of Awareness**
- C. Parallels between the Narrative and the Plot Structures**
- D. Withholding and Selecting Information**
- E. Secondary Narrators**
- F. Tertiary and Quaternary Narrators**
- 、Conclusion

紹介に際して

・ベルナツ教授の著作は非常に優れたものではあるが、文章の特徴として、良くも悪くも難解であるという性質を持っている。今報告では、報告者の技量の及ぶ範囲内においてベルナツ氏の論文を分かりやすく噛み砕いて説明したい。

□、Introduction

A. The Diversity of interpretations of The Brothers Karamazov

(カラマーゾフの兄弟の解釈の多様性)

カラマーゾフの兄弟における解釈(ドストエフスキーが何を語ったか?)

- ① 悪魔主義的 Satanism 解釈(L.A.Zender)
- ② 弁神論的 Theodeicy 解釈(Hans Plager)
- ③ その両者を共有する解釈(Maxim Gorkij)
- ④ ロシア正教の擁護とする解釈(ロシア正教会最高会議)
- ⑤ カトリックに対する攻撃とする解釈(C.M.Woodhouse)

どの解釈が正しく、どの解釈が間違っているかということを論ずることは無意味である。

B. The divers Views on Dostoevsky' s Technique

(ドストエフスキーの技法への眼差しの多様性)

ドストエフスキーがいかに語ったか?

- ①ドストエフスキーの作品の登場人物は作者のように語っている(ドブロリューボフ)
- ②ドストエフスキーにおいては、すぐさま最初の一言で、その会話の内容ではなく、その響きによって、フォードル・パープロヴィチ・カラマーゾフが話したのか、ゾシマ長老が話したのか、ラスコーリニコフ、あるいはロゴージン、スタブローギンあるいはキリーロフが話したのか理解する事が出来る(ドミートリー・メレジュコフスキー)
- ③ドストエフスキーによって描かれた世界は現実性とファンタジーを浮遊するような世界である(アンリ・トロワイヤ)
- ④ここには出来事の現実的類似性が、他のドストエフスキーの作品の多くよりも語られているのである。(アブラハム・ヤルモリンスキー)

・このような技法への眼差しの多様性を、ベルナツプ教授はモネの絵画に喩えた。モネはグリーンとパープルの絵の具を使って青い水を描くことが出来た。異なる技法への眼差しは、水について語るか、絵の具について語るかという視点の違いに過ぎない。

II、The structure of Inherent Relationships（テキスト内的関係の構造）

A. Some Property of the inherent Relationships（テキスト内的関係のいくつかの特性）

○作品全体を4つの構造 structure に分割する。

①テキスト内的 the inherent 構造(2章で議論)

②歴史的 the historical 構造

③連続的 the sequential 構造

④物語的 the narrative 構造(4章で議論)

・テキスト内的構造の例—fiat(ささやき)

①マクシーモフをフォン・ゾーンと語るフョードル

地主のマクシーモフが修道院の方へ駆け戻って行った。

「フォン・ゾーン(訳注:当時評判になった殺人事件の被害者)そっくりだ」だしぬけにフョードルが言った。(14, 34)

・フョードルが語るフォン・ゾーンという言葉自体がフョードル自身の運命(殺害される)を示唆している。

②イワンがアリョーシャのもとを去る場面と、ドミートリーがアリョーシャのもとを去る場面の類似性

・イワンはふいに身をひるがえすと、もはやふりかえりもせず、歩み去って行った。昨日とはまるきり違う性質のものとはいえ、それは兄ドミートリーが昨日アリョーシャのそばから去って行った様子と似ていた。この奇妙な発見が、この瞬間、愁いと悲しみに閉ざされたアリョーシャの頭の中を、矢のようにひらめき過ぎた。彼は兄のうしろ姿を見つめたまま、しばらく待った。(14, 241)

・「…さよなら。俺のことを祈ったりしてくれるなよ、そんな値打ちはないんだから。それに全然必要ないしな、まるきり必要ないよ…全然いらぬことだ！あばよ！」そして彼はふいに去って行き、今度はもう本当に行ってしまった。(14, 144)

・読者をまごつかせるからかいのような作用を及ぼす。

B. Karamazovism(カラマーゾビズム)

○カラマーゾフに特有の性質というものは、家族の性質となり、家族の性質の総和の一部となっている。それらのうちのいくつかは象徴的な言葉の中に結晶化されている。それらは全体でカラマーゾフ的なものと呼ばれている。

・象徴的な単語

① 形容詞の《подлый》(卑劣な)とさらには名詞の《подлец》(卑劣漢)

② сладострастие(情欲)

③ Насекомое(毒虫)

④ Нога(足)はСладострастная распущенность(好色な退廃)

と結びつき、Насекомое(毒虫)は Срадоcтpаcтнaя пopочнocть(好色な退廃)と結びつき、Кpовь(血)は Слaдcтpаcтнoe нacеление(好色な乱暴)と結びついて、この3者は3位1対をなす。

⑤ Жажда жизни(人生の渴望)

C. Some Methodological Problems(いくつかの方法論的な問題)

○カラマーゾフ性に対する問題の疑問点

①同じカラマーゾフ的登場人物でも好色さなどの段階で性質的に異なる。

答え:好色的な階段の中においての位階が存在する。

「しよせん同じ階段に立っているんですよ。僕はいちばん下の段だし、兄さんはもっと上のどこか十三段目あたりにいるってわけです。… いちばん下の段に足を踏み入れた者は、どうせ必ず上の段にまでのぼっていくんですから」「じゃ、つまり、全然足を踏み入れずにいるべきなんだな?」「できるなら、まるきり足を踏み入れないことですね」「で、お前はできるのか?」「たぶんだめでしょうね」(14, 101)

・ベルナツ教授によると、フョードルが最上段もしくはその近くに、ミーチャが十三段目に、イワン、グルーシエニカ、スネギリョフ、フェラポント、スメルジャコフ、ラキーチンが彼らの下に、おそらくこの順序で、そしてアリョーシャがいちばん下の段にいるということだ。この階層の位置どりは小説の展開につれて変わっていくらしい。

②前章では、Жажда жизни(人生の渴望)などがカラマーゾフ性の一部として取り上げられてはいるが、しかしスメルジャコフ・ドミートリー・ペルホーチン等の登場人物には自殺的・あるいは自己破滅的な傾向も見られ、矛盾しているのではないか?

答え:このような矛盾対立の要素こそがカラマーゾフ性の主要な特徴なのである。

「ふつう人生では両極端の中間に真実を求めねばならないのが常であります、この場合は文字通り違います。何より確かなことは、最初の場合に彼が心底から高潔だったのであり、第二の場合には同じように心の底から卑劣だったということであります。これはなぜか?ほかもありません、彼が広大なカラマーゾフ的天性の持主だからであり…ありとあらゆる矛盾を併呑して、頭上にひろがる高邁な理想の深淵と、眼下にひらけるきわめて低劣な悪臭ふんぶんたる墮落の深淵とを、両方いっぺん見つめることができるからです。」(15, 129)

D. The Devil(悪魔 Ч е р т)

○カラマーゾフの兄弟における最もアレゴリー的な登場人物=悪魔

①性格的に悪魔に最も近い人物=大審問官一無神論と、社会主義と反抗の具象化

②リーザ・ホフラーコバの破壊的な願い

「…あたしはただ良い事をしたくないだけ。あたしは悪い事をしたいのよ。病気なんか全然関係ないわ」「なぜ悪い事をしたいの?」

「どこにも何一つ残らないようにするためよ。…みんながあたしを取り囲んで、あたしを指さしているのに、あたしはみんなを笑ってやるんだわ。とっても楽しいじゃないの。」(15, 22)

③指(палец)と残酷(Жестокость)さ

うめく子どもの切られた指、残酷な自己卑下に陥って扉に指をはさむリーザの指、アリョーシャの指は骨までかじられ、呪われた、グリゴリーの死んだ息子は六本指だった。

④甘いもの(Сладость)と残酷(Жестокость)さ

- ・ イワンの語る残酷なトルコ人—甘い物好き
- ・ 実はその時アリョーシャはジャムを食べている。
- ・ リーザ・ホフラコバも甘いものの好き
- ・ 甘いものはサディズムの結晶として描かれる

⑤悪魔主義(Дьяволизм)はイワン、スメルジャコフ、リーズ、大審問官、ラキーチン、フョードル・パープロヴィチを、さまざまなかたちで登場する悪霊たち、ゾシマ長老への秘密の訪問者、カルブ、悪い悪魔達を結合させる結び目として、神の世界と秩序の形而上学的否定として機能している。

E. The Buffoon(道化Шут)

①道化の性質、マクシーモフ・フォン・ゾーンつながりフョードル・カラマーゾフ、

②マクシーモフのモークロエ村における会話と、ゾシマ長老の庵室における会話との類似性

③フョードルの死後は、ホフラコワ夫人が道化の代表者となる。

・道化性は、自己の名のもとに自らの形式によって世界を創りだし、合理的で社会的にも宗教的にも受容された外観を否定し、自己劇化にとりつかれた終生の羞恥心へと堕ちていきながら、それを実際上、恒常的に否定することである。

F. The Nadryv(病的な興奮Надрыв)

①この感覚は道化であるフョードルやマクシーモフだけにあてはまるものではなく、他の登場人物のグループであるイワンやカテリーナ・イワーノブナやリーズやグルーシェニカやミーチャやスネギリョフにもあてはまる。

②象徴的場面

「今しがたホフラコワ夫人の口にした《病的な興奮》という言葉が、彼をほとんど震え上がらせたのである。なぜなら、まさに今日の明方、半ば目ざめた状態で彼はおそらく自分の見た夢に答えながらだろうが、ふいに「病的な興奮だ、病的な興奮さ」と口走ったからだった。昨夜は一晚中、カテリーナのところでの昨日のあの一幕を夢に見ていた。そこへ今ふいに、カテリーナは兄イワンを愛しているのに、何かの演技から、《病的な興奮》から、わざと自分を欺き、感謝の念から生じたとかいうドミートリイへの偽りの愛によってみずから自分を苦しめているに過ぎないという、ホフラコワ夫人の端的な、一本気な断言が、アリョーシャを驚かせたのだ。」(14, 170)

③Nadryvの性質—病的な興奮は—完全に道化性と相反するものであり、プライドや富や高邁さや、道化的になることに対する不安などを秘めている。病的な興奮は自分自身を傷つけるためにために他人を傷つけ、—反対のバリエーションでは—他人を傷つけるために自分自身を傷つけてしまうのである。

④登場人物たちの相対的位置関係—道化性と病的な興奮は、言うなれば、同様の軸に位置している。そ

れらはこの軸の両端にあり、さまざまな登場人物達はカテリーナ・イワーノブナは片方の端にあって、マクシーモフはもう片方の端にあるのである。スネギリョフは真中に近いところにいる。なぜなら彼はヒステリックな道化だからである。イワンやフョードルといったこれらの登場人物達はこの軸に近いところにおり、片方は病的な興奮に近く、もう片方は道化性に近い。

G. Divine Grace(神の恵み *Божья благодать*)

①アリョーシャや、ゾシマ長老や、彼の兄弟であるマルケルの姿に具現化される。

・アリョーシャの子供時代に関する話—ユロージヴィの母との思い出(14, 18)

・マルケルと自然との戯れ(14, 263)

・ゾシマ長老と母との思い出(14, 327)

・「大審問官の伝説」におけるキリスト(14, 226—227)など

②太陽の光、ランプの光、蠟燭の光、涙、ひざまづくこと、抱擁、献身、母と子供、沈黙、罪と祝福といった語句が小鳥や、森や、野原や、大地や、植物や、他人を批判する事の否定や、天使の独自性や、種子というような語句と結合している。種子は恵みの秘密の存在を生みながら、死に絶え、芽を出す。

H. The Ways in Which the inherent Relationships shape the Reader's Experience

(テキスト内関係が読者の経験を形成する方法)

○小説の主人公たちは、カラマーゾフ性の階段と同じようにキリスト教的、そして実存主義的階層に配列され得る。

①キリスト教的階層—マルケルとゾシマ、アリョーシャ、信仰心のある女性たち、パイーシイを通じたキリストから、ミーチャとグルーシェニカという中立的で両面価値的な登場人物、そしてリーズ、イワン、フェラポント、スメルジャコフ、大審問官、悪魔そのものへと広がっている。

②実存的階層—*надры* 病的な興奮の体现者であるカテリーナ・イワーノブナとアデライーダ・イワーノブナから、スネギリョフのように両方向を見ている人物を通して、道化であるマクシーモフへと広がっている。

○小説におけるテキスト内関係の(言葉の)構造の機能。

① 小説の部分部分の間に結びつきをつくること。

② 読者の興味を引き続けること。

③ 第3には、この興味を作者が重要だと考えている小説のある部分にひきつけること。

III、The Plot (プロット)

A. Juxtapositions(並列)

○歴史家や叙事詩詩人によって何世紀にも渡って発展してきたテキスト構築の技法の1つとしての並列

①作品外部からのエピソードの導入

「とにかく私は、二昔前の<ロマンチズム>の世代に属する一人の娘を知っているが、この娘なぞは数年にわたってさる紳士におよそ理解しがたい恋を寄せ、いつでもその男としごく円満に結婚できたのに、超

えがたい障害を自分でひねりだして、嵐の夜、絶壁にも似た高い岸から、かなり深い急流に身を投じ、もっぱらシェイクスピアのオフエリアに似たいという、ひとりよがりの気まぐれから生命を落としたのである……」(14, 7-8)

②似通った出来事の並列

・ミーチャの体験は3度にわたって読者の前を通り過ぎるのである;彼は3度《熱い魂の告白》を行い、1000ルーブルを得るために3つの試みを行ない、3度苦しみにさらされている。テキストにおけるこの並列は、小説世界における時間的な配列の例として説明することが可能。また、イワンとスメルジャコフとの3度の面会が不吉な現実性からイワンの幻想へと移行することを簡単にしている。

③相反するものの並列

・イワンは最も残酷なアネクドットの一つを次の言葉で終了している。「ついでに、トルコ人は甘いものが大好きだそうだ」(14, 217)。

○大部分の並列の技法は、読者に隠蔽された形で用いられている。

B.Control of The Readers Memory

(読者の記憶の管理/支配)

①小説の特徴—映画、演劇、オラトリオ(聖譚曲)、あるいは蒔絵のような、続けざまに感覚へいくつかの刺激を与える芸術とは異なり、小説は複雑に折り重ねられた長く広大な概念の配列であり、芸術や自然においてもっとも一次元に近いもののひとつである。経験するためにこんなに長くかかる芸術様式は他にはほとんどない。『カラマーゾフの兄弟』も、2年以上かけて、連載、出版された経緯を持っている。

②そのため、小説の時間軸においては2ヶ月半前である出来事も、読者の経験においては、800ページ前、そして小説が最初に掲載された『ロシア報知』の号でいうと22ヶ月も前に起こっているという事態が容易に存在する。

③ゆえに、ドストエフスキーは、それが次にくる章のために必要だという場合や、読者が時間経過についての説明を必要としている場合において、慣習的に章の最初のページを、読者の記憶に訴えかけ、過去を説明する情報を提出するために利用している。

C. Use of Readers Expectations

(読者の期待の利用)

○読者が抱く、期待を利用した語りの手法

①未来の出来事をはっきりと予見する語りの手法—第一章の最初で彼は『フョードル・パーブロヴィチは今からちょうど13年前、悲劇的な謎の死をとげて当時たいそう有名になった(いや、いまでもまだ人々の口にのぼる)』(14, 7)と回想している。この語り手によることわりは、ミーチャの脅迫と、スメルジャコフのつぶやきに関する事実の語りによって実現されている。

②ラキーチンのような完全には説明されていない登場人物たちや、あるいはモスクワの医者や、あるいはイリュシャは、現れてから多くのページの後にも説明されないままである。その手法は読者の完了への期待のおかげで、不足部分をもつ、なにか完全ではない情報を作り上げている。

○『カラマーゾフの兄弟』の登場人物たちは二つのタイプに分けることが出来る。

①徐々に読者の記憶に残っていく主人公たち―フョードル、スメルジャコフ、三人の兄弟、カテリーナ・イワノブナ、リーズ、グルーシェニカとゾシマ長老。

②読者の記憶に残らない二義的な登場人物たち―ミウソフやグリゴリーや、マクシーモフや、カルガーノフや、パイシー神父や、ラキーチンや、ボレノフや、スネギリョフや、サムソノフや、スムーロフや、ヘルツェントゥーベや、フェチュコーヴィチなど。

＊主人公たちは、作品に実際には登場しない場面であっても、他の登場人物の台詞等においてしばしば登場している。

D. Inherent Relations as Sequential Links(連続的な結びつきとしてのテキスト内的関係)

○多元的な行動と1次元の情報の間の矛盾を克服するために使用されている特別な手法の利用。

①ミーチャが連れ去られた時にカルガーノフは、「玄関に走りこみ、片隅に座ると、うなだれ、両手で顔をおおって泣き出した…」(14, 461)。

②カルガーノフの状態が、ゾシマ長老の体が腐り始めた時のアリョーシャの状況を、形式主義的にも修辞学的な意味においても思い起させる。カルガーノフの状況は、まさしくアリョーシャが逃げ出し、大地に身を投げ出した時の彼の行動を引用したかのようなのである：「彼は大地に接吻し、大地を愛する事を、永遠に愛する事を狂ったように誓いつづけた…」(14, 328)

○アネクドートの重要性

①イワンの語る「大審問官の伝説」は単体で議論されることが多いが、それ以前にイワンは教会裁判に関する論文の中で国家が全ての力をもってして教会の一部にならなければいけないとしている。(14, 56-61)また、コーリャ・クラソートキンのような社会主義的なリーダーや、スメルジャコフやフェラポントやラキーチンやホフラーコバ夫人などの人物達とテキスト内的関係の構造において結びついている。

②また、「大審問官の伝説」は、アネクドートそのものとして、愛の自己犠牲的行為を虚偽の病的な興奮とともに行った情け深いヨアンと、地獄を訪れて怒れる神と人間との仲介人となった聖母マリア、グルーシェニカの語る「一本の葱」のアネクドート等と比較されて存在する。

E. Connections in the World Shown in the Novel(小説世界における結びつき／関係)

○小説世界における金銭の重要性を指摘

①欲望の中心となり、殺人の動機となり、それぞれの登場人物の関係性の土台となる。

②金銭的な関係が物語のプロットのさきがけとなり、感情的な関係へと発展していく。

例1：カーチャは、自らを売るためにミーチャのところへやってくる。ミーチャはごくふつうの商業的反応、つまり彼女を買うかあるいは追い出すか、を考える。ところが、彼はその代わりに彼の残りの財産の大部分である四千五百ルーブルを彼女に渡す、という反応をみせる。彼女は崇拜という行為で応え、病的に恋におちる。彼女は、結局はもっと正常な実利的反応を示し、負債を払い、そして手を差し出すのだが、彼女にとっては、金銭上の関係が感情的なそれによって影を投じられたのだ。彼女は関係のイニシアチブをとり、ミーチャに三千ルーブルを任せた。彼は必然的にふたつの道があると考えた、頼まれたとおりに金を

送るか、あるいは、この金で自分自身を彼女に売ってしまうか。代わりに、彼はその金を横領し、彼の最初の反感を恥辱へと具体化する。それは横領した金のすべてを使い込むという過ちでますます悪化していく。

例2: この金銭的關係から感情的な關係への変形は、ミーチャが相続した財産の歴史という側面によくわかる。フォードルとミーチャの母との間の心からの憎しみはフォードルがそのために彼女と結婚した財産にかわる。彼女の死後、フォードルは自らが彼女から相続した二万五千ルーブルの取り分をミーチャが請求するまで、ミーチャのことを忘れてしまう。この金銭上のつながりはまもなく感情に帰する。そしてその感情はフォードルが実利感覚を無視して腹いせにミーチャの価値のない略式借用書／手形を手に入れたところまでいってしまう。彼はグルーシェニカをつかってこの負債を要求させようとし、この商業的な關係がしだいに感情的なものすなわち情欲にとってかわられる。ミーチャに対するグルーシェニカの経済的な力は、実利的な反応ではなく、感情的なものを暗示している。つまり、彼女を殴りたいという欲求がしだいに彼女を所有したいという欲望にとってかわられる。彼は、同じ実利上のつながりが感情的なものへ移行したことからスネギリョフを殴り、カーチャはスネギリョフ家へアリョーシャに二百ルーブル届けさせる。スネギリョフは告別の悲哀をもってお金のもつ購買力を数え上げ、病的な興奮の感情からそれを拒否する。その感情がのちにアリョーシャへの精神的な依存にとってかわられる。

③感情的構造の6角形図が出来上がるが、小説の最後で崩壊する。

F. Characters who Shape the Casual Pattern(因果關係的なモデルを形成している登場人物達)

○小説内における原因と結果の連鎖關係について

例: 一つの結果に対する複数の原因。

結果: イリューシャの行為。「いきなり飛び出すと、自分のほうからアリョーシャに組み付いてゆき、相手が身動きする間もないうちに、怒り狂った少年は頭を下げ、両手で彼の左手をつかむなり、中指にひどく噛み付いた。」(14, 163)

原因①: 最初の鎖はスメルジャコフから始まる。彼は外面的な原因もなく、自分自身の自然の動機に従うのである。その自然が彼に虫けらを踏み潰させ、猫を縛り首にさせ、最終的には父親殺しと自殺にまで至らしめる。彼はイリューシャに対して飢えた犬にピンの入ったパンを与えるように教える。犬はすぐにとびついて、丸呑みにするなり、悲鳴をあげて、ぐるぐるまわりだすと、やにわに走り出し、走りながらきゃんきゃん悲鳴をあげて、そのまま消えてしまう。イリューシャはそのことについてコーリャに伝え、コーリャはそのことに、そのような振る舞いをやめるようにと反応している。その時イリューシャは、今度はコーリャにこう伝えさせる。「・・・こうなったら僕はどの犬にも全部ピンを入れたパンをまいてやるから。どの犬にもだぞ！」(14, 482)少年達は彼をからかい、いじめ始める。かれはその攻撃に対してコーリャに対する攻撃で答える; 少年達は彼に対して石をぶつけ始める。イリューシャはアリョーシャに対して石をぶつける; そしてイリューシャが何故かと答えると、その答えとして、イリューシャは彼の指を噛んでしまう。

原因②: 二つめの、主な、事件の長い鎖は、アデライーダ・イワーノブナのわがままがその始まりとなる。彼女のフォードル・パープロヴィチとの無意味な結婚が原因となるのである。結婚は彼女に駆け落ちをし、その後、屋根裏部屋での死に至ったのである。彼女の息子であるミーチャは自分の富に関する誇張された

イメージを持って成長し、金を浪費し、絶えず次から次へとお金を要求する事によって、父の怒りを招いてしまう。フョードルはスネギリョフを、ミーチャの手形を買い占めるために雇う。ミーチャは、スネギリョフのあごひげを引っ張りまわし、打ちたたく。スネギリョフの息子のイリュシャはアリョーシャへの攻撃によってそれに応えるのである一彼に最も近づきやすかったカラマーゾフ家の一人に。

○小説のプロットにおける連鎖関係における登場人物の性格付け

- ・アリョーシャー信仰と結びついた無為
- ・ドミートリーー優柔不断
- ・イワンーこちら側に止まろうと欲するが、しかし様々な出来事の鎖に参加せざるを得ない
- ・フョードルー因果関係的な自然なモデルを歪曲した風変わりな反応

G. Parallels between Chronological and Inherent Connections

(年代とテキスト内的関係の類似)

○年代の歪みの代表一因果関係における遅延(原因と結果との間に時間があること)

・小説のエピグラフ:「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かな実を結ぶようになる。」一最終的な登場人物達に対する恵みの作用としての記述。しかしながら、実際に恵みの作用が起こるまでには時間差がある。

①アリョーシャの場合一小説の中盤で恵み(ガリラヤのカナ)

②ドミートリーの場合一ミーチャにゾシマ長老とカテリーナ・イワーノブナがひざまづくか、あるいはヘルツェンシトゥーベ医師が1フントの胡桃を与える時。

③イワンの場合一イワンに、恵みによって種をまくのは彼の母親とアリョーシャであり、アリョーシャは大審問官伝説に登場するキリストに真似て、彼にキスをするのである。しかしながらイワンの救済は完了されてはいない。

＊小説の構造の背後には、彼がゾシマ長老やその兄マルケルの言葉を使って説教した宇宙の調和を作品内において具現化しようとしたドストエフスキーの意図が見られる。

IV、The Narrative Structure(語りの構造)

A. The Indistinct Narrator(判然としない語り手)

○語りの構造の4分類

①第一の語り手(叙事詩的手法)一語り手自らに起こったことや、見聞きしたことを直接的に自己の経験として語る手法一この場合はドストエフスキー自身

②第二の語り手(擬似叙事詩的手法)一作家の設定した架空の語り手が、小説の内容を語る手法

③第三の語り手一小説内の登場人物(ゾシマ・アリョーシャ等)が語る手法

④第四の語り手一登場人物が創作した人物達が語る手法(「大審問官の伝説」や「ヨブの物語」など)

○「カラマーゾフの兄弟」においては、第二、三、四の語り手のみが存在するのであるが、当然のことながら、その背後には作品全体を構成するドストエフスキー自身が存在する。

B. His scope and Mode of Awareness(語り手の知識の境界と様式)

○Wayne Booth や彼の先駆者によって研究された語りの手法の中で、よく引用される一つのルール:語り手の知識や観点は明確で不変・不断のものでなくてはならない。このルールからしてみると、小説「カラマーズフの兄弟」はかなりいい加減である。

- ①語り手のアイデンティティが不明瞭で、時折作者であるドストエフスキーの知識や自我とも一体化し、統一性が存在しない。
- ②語り手が出現したり、隠れたりする。語り手が隠れている間は、物語は戯曲方式で進行する。

C. Parallels between the Narrative and the Plot Structures

(語りとプロット構造の類似)

○語り手の意識操作が、読者の登場人物の理解に大きな影響を与えている。

- ①ゾシマ長老:その人間性を強調することもしないで、ゾシマの精神への直接的な洞察をしないことにより、ゾシマを人間らしく統制された個人というよりもむしろ尊敬されるべき神の恩寵の源として強調する。
- ②スメルジャコフ:ゾシマ長老と同様に直接的な洞察をしないことにより、風呂場の湯気と自己破壊的で何ものでもない、抜け目がなくて臆病な精神との中間に創りあげた。
- ③イワン:大審問官の場面のあとになるまで、彼は、情熱的な疑いの知性、墓石あるいは謎のしるしとなりながらただ外面から提示されているにすぎない。しかしながら中盤以降の、スメルジャコフや悪魔との対話の中で内面世界が描写され、救済の萌芽を見せる。
- ④ドミートリー:小説の第一日目は、単なる外面的描写のみであるが、二日目と三日目には内面的描写が行われ、赤ん坊の夢を見るという再生の転換点を通り過ぎた後には、再び外面的描写に戻る。

D. Withholding and Selecting Information(秘密にされ、伝えられる情報)

○小説内においては、語り手が情報を開示・隠匿・編集する役割を担っている。

- ①ありふれた場面を、語りの手法によって喜劇的にするという行為。
- ②語り手には情報が存在するのに、その一部しか開放しないという行為。

例:マルファとグリゴリーの家族におけるスメルジャコフの状態を記述した後での語り手の言葉。「この男についてもいろいろと話しておく必要が大いにあるのだが、読者の注意をそんなに長い間、ありふれた召使のほうにそらせておくのは私としても心苦しいので、スメルジャコフについてはいずれ小説が進むにつれて触れることになるだろうと期待して、物語に移ることにしよう。」(14, 93)

- ③語り手が情報を隠匿し続けて、突然その情報を開示するという行為。

例:語り手は小説の3分の2の中では、街の名前を伝えておらず、その後であたかも偶然に町の名前をうっかり落としたかのように、スコトプリゴニエフスク市と名付けている。そしてこの一節を付け加えている。「悲しいことに、この街はこんな名前なので、わたしは長いこと街の名をかくしていたのである」(15, 15)

- ④大まかな情報については開示するが、詳細な情報については開示しないという行為。

E. Secondary Narrators(二義的な語り手たち)

○今章では、IV. Aで示した、第三の語り手—小説内の登場人物(ゾシマ・アリョーシャ等)が語る手法を紹介している。

①登場人物たちの語るアネクドートが、強力に登場人物たちの性質を表現する。

・グルーシェニカが語る「一本の葱」のアネクドート—救済の因果関係的プロット

・フョードル・カラマーゾフが語るフォン・ゾーン—道化の性質

・リーザがアリョーシャに語る、甘い物好きで残酷な外国人の話—イワンがアリョーシャに「反逆」の章で語る、残酷な逸話との類似的な関係を作り出し、イワン・アリョーシャ・リーザの三角関係的な構造を暗示する。

②様々な登場人物が1つの出来事を様々に語ることで、小説に多声的なイメージを与え、人間の証言の背後に隠された真実の苦境を示す。

・ミーチャがスネギリョフの顎ひげをひっぱった事件に関して、フョードル、ミーチャ、カテリーナ・イワーノヴナ、そしてスネギリョフがこの一件を物語る。フョードルは合理的ではない、いらいらするような事実を語る。ミーチャは自らを野獣にたとえ、墮落の道徳的な面にふれている。カテリーナ・イワーノヴナは＜病的な興奮＞を付け加え、一方でスネギリョフは自分の明らかな特色を示す逸話で強力に個人的な恥辱を持ち出す。

・ミーチャの父親殺しの嫌疑における様々な人物達の言述

F. Tertiary and Quaternary Narrators(第三および第四の語り手)

○第四の語り手—登場人物が創作した人物達が語る手法(「大審問官の伝説」や「ヨブの物語」など)についての解説。この手法の導入の理由は、主に語り手の言葉に厚みを加え、作者をも超えた絶対的な価値概念を小説内で獲得するため。

①失くしたひとり息子をいたんでゾシマのところに女性がやってきたとき、ゾシマは、直接彼女に応えることはせず、第三の語り手を導入する。

「こういう話がありますぞ、お母さん。…あるとき、昔の偉い聖人が聖堂の中で、やはり神に召された幼い一人息子をしので、お前さんのように泣いている母親をごらんになった。そこで聖人はこうおっしゃったのだ。『お前はそういう幼な子たちが神さまの前で、どれほどこわいもの知らずにしているか、知らないのか?…だから、お前も泣いたりせず、喜んでやりなさい。お前の子供もきっと今ごろは神さまのもとで大勢の天使たちの仲間入りしておるだろうよ。』」(14, 45—46)

②イワンの語る「大審問官伝説」—イワン自身の生活におけるよりもっとはっきり線が引かれ、もっと絶対的な価値観がある段階へのイワンの投影となる

③グルーシェニカの「葱をもった女」—起こることすべてが純粹でまっすぐな世界への彼女自身の投影

○このような、もっとも語りのフィルターを通した形において、至高性のある、いわば形而上学的なテーマが用いられるということにより、作者による一種の遠近法的な技法が用いられている。

V. Conclusion(結論)

○疑問: 小説「カラマーゾフの兄弟」は続編があるはずだったのか? それとも完結されているのか?

答え①:続編があるはずだった(Neille B.Benett)。

理由:小説の導入部分である「作者の言葉」には次の一節が含まれている。

「だが、困った事に伝記は一つだが、小説は二つあるのだ。重要な小説は二番目のほうで、これは、すでに現代になってからの、それもまさに現代のこの瞬間における、わが主人公の行動である。第一の小説はすでに十三年前の出来事で、これはほとんど小説でさえなく、わが主人公の青春前期の一時期にすぎない。だが、わたしとしては、この第一の小説を端折ってしまうわけにはいかない。なぜなら、第二の小説の多くのことが理解できなくなるに違いないからだ。」(14, 6)

答え②:完結されている(モチューリスキー等)。

理由:ドストエフスキーは「罪と罰」においても、同じような予告を行っている。

「しかし、そこにはもう新しい物語が始まっている——人の人間がじょじょに更新していく物語、じょじょに更生して、一つの世界から他の世界へと移っていき、今まで全く知らなかった新しい現実を織る物語が始まりかかっていたのである。これはまさに新しい物語の主題となりうるものだが、しかしこの本編の物語はこれで終わった。」(6, 422)

○結論:このような芸術作品の壮大な目論見の芸術的な価値は、偉大な構想が滅多に美術的な事実になることはないというあまり知られていない原因によっている。そして予告される偉大な終わることのない全体が作品においても、読者においても、美的に作用しているのだ。

○最後に、新たな研究テーマの可能性:登場人物達的意思決定における選択の理論。